Waku Waku エッセイ

川西町の宝をどう守るか

堤　江実

「あの季節がやってくる！」

東京千代田区の半蔵門にある小さなフレンチレストラン「ル・トライアングル」の季節のお勧めは、西瓜のケーキです。オーナーシェフの佐藤さんの出身地、山形県尾花沢特産の旬の西瓜をそっくりシフォンケーキにとじこめて・・・。私たちみんなワクワクしながら待ってます。

ところが今年はそれどころではありません。

これからという時に尾花沢の西瓜を襲った記録的な豪雨。山形では史上初めてという豪雨・各地で川があふれ、西日本と同じように想定をはるかに超える被害でした。その上の猛暑。呆然とする人々の日常は瞬間に奪われました。

ずっと歴史はつながっているとおもっていました。

昨日の続きが今日で、今日の続きが明日。今年の続きは来年で・・・。でも、世界中を飲みこんだコロナ禍がおさまったとしても、気候危機後は、同じような昔には戻りません。

世界はどのようにかわるのか。

誰にも答えはわかりません。

少なくとも、世界中が信じたグローバリゼーションの絵が、たちどまって、もう一度考えるまったなしの崖っぷちのようです。

化石燃料の上にそびえたアメリカ中心の世紀は終わったのです。コロナが明らかにした世界はひとつという時代。人類は対立している暇はない。すべての国が、すべての人が、助け合い、手を取り合っていくしか、生き延びる道は残されていないと、たくさんの人が確信した時代です。

こんな時だから、小さな自治体だからこそ出来ることもあります。今、WORLD LOCALIZATIONというムーブメントが注目されています。

大量農薬や中央集権と縁を切って、自然の中でミツバチやカエルがいきいきと暮らしている地域です。

自然に恵まれた日本の地方から、幸せな人々の声が聞こえてきます。本当に人類は絶滅危惧種なのでしょうか。この美しい星で幸せに生きていくことはできないのでしょうか。

これまでにも川西には、環境庁のお仕事で二度ほど環境絵本の朗読に伺いました。

きれいな空気、美味しい食べ物、人々のぬくもり、おいしいお米、おいしいお酒・・。

この町の宝物をどうやってまもっていくのか。

日本中にこうした小さな、誇りに満ちた自治体がふえています。その中心になっているのが、自分のこととして立ちあがった若い人と女性です。川西にもきっといるにちがいありません。

今年出した本『気候危機～子どもたちが地球を救う』（汐文社）は、私の文章ですが、川西にご一緒した環境の専門家、功刀正行博士に監修をお願いしました。

コロナはいずれ終息するでしょうが、気候危機は日々進行中です。

まず知ること、本当に大切なものは何かを理解すること。

コロナはきっかけです。

人が大切にされる社会とは、愛しあい、助けあう生き方とはなにかを考えるぎりぎりのきっかけがコロナなのではないかと思うのです。

堤　江実（つつみ・えみ）

詩人

立教大学文学部英米文学科卒。
文化放送のアナウンサー、グリーティングカード、ラッピングペーパーの（株）カミカの経営を経て、現在、詩、翻訳、エッセイ、絵本などはば広いジャンルでの著作、およびミュージシャンと競演する自作の詩の朗読コンサート、詩の朗読のワークショップ、日本語についての講演、研修などで活躍中。2011 年、詩と絵本の活動に対して、東久邇宮文化褒賞受賞。

著書・「朗読力」（PHP）「ことば美人になりたいあなたへ」（清流出版）「日本語の美しい音の使い方」（三五館）「アナウンサーになろう」（PHP研究所）他多数。
翻訳・「魂の経営」「生かされて」（共にPHP）「ゆるしの法則」（サンマーク）他多数。
詩集・「ミラクル」（たま出版）「ぶくぶく」（PHP）「エンジェル」（三五館）、「一年後のレクイエム、そして未来へ」（EMI）「世界中の息子たちへ」（ポプラ社）他多数。
絵本・「うまれるってうれしいな」「水のミーシャ」（読書推進運動協議会賞）「風のリーラ」（ユネスコ・アジア文化センター賞）他多数。

手話を通して学ぶ、伝える尊さ

松田　陽

「バリアフリー」という言葉が誕生して久しい。スロープの設置などのハード面の整備はもちろんだが、〝誰かの困りごと〟は、周囲の協力でどうにかなることも多く、手を差し伸べることが何よりも大切だと思っている。「視覚障がいは物との、聴覚障がいは人とのコミュニケーションを遮断する」と言われることがあるが、聴覚に障がいのある方ともスムーズにコミュニケーションができればと、約5年前から手話の勉強を始めた。

始める前は「ジェスチャーのようなもの」だと思っていた手話。しかし、学びを進めると、ろう文化や地域性を背景とした言葉や文法の成り立ちがあり、「言語」としてとても興味深い。例えば、地名を「山形＝さくらんぼ」、「秋田＝フキの葉」など名産で表現したり、歴史が関係していたり、そういう意味でも面白い。

上手に手話を表出できずに、何度も言い換えることもよくあるが、相手に伝わったときはとても嬉しい。ライターとして「誰かの想いを発信する仕事」を、かれこれ２００カ月ほど繰り返しているが、「相手に伝わることがいかに尊いか」を、改めて感じられるのは意義深い。

聴覚に障がいのある方だけではなく、手話学習者同士の交流も盛んで、これまでにはない出会いも増えた。手話を始めたことで、自分の世界もどんどんと広がりを見せ、多彩な視点を持つきっかけになっている。

大人になっても、まだまだ成長できるのだと、そのことがとても嬉しい。

（ライター／山形市）

フレンドリープラザとのご縁

工藤　巳幸

もうどれ位になるでしょう。フレンドリープラザの開設が１９９４年とありますから２０年以上になるでしょうか。プラザとのお付き合いを語るのに欠くことのできない人がいます。私がプラザへ行くようになったのはいつからかと考えるとき、その人の経歴を辿ると早い。私どもの劇団の代表、シュウさん（劇団の仲間内ではそう呼びます）のこと。

１９９７年、シュウさんがプラザ付属演劇学校の教頭に就任してからです。様々な演劇に関する情報や井上ひさし先生のお話など、豊かなものがシュウさんからもたらされました。以来、数々の公演やイベント、観劇で足を運び続けています。

今までプラザで観たたくさんのすばらしい芝居の中で、今でも忘れられない特別な舞台、それは２００１年緒形拳と串田和美の『ゴドーを待ちながら』です。舞台の上に客席を作り、最高の役者とまさに特別な空間をつくり公演された。さすがフレンドリープラザ、と感心し、感動したこと、あの空気感を思いおこすと当時のワクワクドキドキがよみがえります。

例年ですと、今の時期には何度か足を運んでいるはずが、今年はまだ一度も行けていません。こんなことはここ数年ありません。私にとって、芝居のいしずえの一つとなっているにちがいない場所。また例年どおりに、ワクワクドキドキをさせていただきたく、足を運ばせてもらえる日を楽しみに待つしかありません。

（おやこミュージカル／秋田市）